<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>タイトル</td>
<td>リッケルトの価値体系 三、完</td>
</tr>
<tr>
<td>著者</td>
<td>米田 庄太郎</td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td>経済論叢</td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td>京都大学出版物論文</td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td>1922-03-01</td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td><a href="https://doi.org/10.14989/127876">https://doi.org/10.14989/127876</a></td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td>部門別論文集</td>
</tr>
</tbody>
</table>

京都大学
叢論 潤經
號 三 第 巻四十一 第
発行日 一月三日 一九三一年

最低生活費課税論を駁す
マルクス氏餘剩價值説の評論
小作制と小作法
我國に於ける国民所得の発達
戦国の都市

論

法學博士
小川 郷太郎

論

法學博士
河田 勝郎

時

法學博士
米田 庄一

論

法學博士
作田 莊一

雑録

學術論<br>

理論的<br>

社會論<br>

地學観<br>

論<br>

就きて<br>

講録<br>

新<br>

一<br>

論<br>

讀

苑<br>

講<br>

本書<br>

功<br>

同<br>

社<br>

同<br>

學<br>

学<br>

士<br>

士<br>

黑<br>

正<br>

嚴
リツケルトの価値体系

第一章

価値体系と世界観

本課は、価値体系の論諭を終えることにより、出る。妥当の要求を以
て現在存在しない一の部分、即も完全に終結された人格的現在生活の哲学者が、要求されてくる。

而して然に、異なる並列を立てたわけではなく、一の位置を立てたのである。此の自人は三つの

統一の意義を考察することが、原理想に於て可能となるのである。
併し地方に於ては、同様に断乎として言明される可さものがある。夫れは此の価値概念は世界観
問題の解決に於て、吾人如何をも数へないを云ふことである。是れまでに位階と云えば、夫
れは常に只一の形式的関係を意味するだけのものと解される可さもの
或は中心的なものと認められる可さから、如何なる価値問題から吾人は信観の一に
在せる可さの統一に進む可さから、又価値の如何なる統一的に決定されるかの前後で
あるればならば名え主張するか、或は此等の見地の何れも、偏局な不完全なものであるか
絶て此等の問題
説明。"ネルトの価値概念（三）
第十四巻　第三号　五九
五七九
生活意義のため自身に於て徹底的なる問題の、種々なる可能的解決形を展開し、そして各個人を以て満足させねばならぬ。いづれにしても此等の事は、価値體系その物に関することでないと、余者

価値體系における哲学の地位

哲者は常に、生活を目的に於て徹底的なる解決形を展開し、そして各個人を以て満足させねばならない。いづれにしても此等の事は、価値體系その物に関することでないと、余者

価値體系における哲学の地位

哲者は常に、生活を目的に於て徹底的なる解決形を展開し、そして各個人を以て満足させねばならない。いづれにしても此等の事は、価値體系その物に関することでないと、余者
箇別学科に先だっって進むと云はれる、共等の時々要求される假設的形而上學は、全く疑はしき企

箇別学科から箇別される普通的原理が、明らかにされ得るのである。箇別学科は形而上學の地位に入り込もう。面して夫れは生

然的に理論の最後の目標を反省する。此くて夫れは形而上學の存在の有する全體意義の、一の統一的共

学は常と将来を待つことが出来するが、是に反して箇学は単に一の特殊的終結に過ぎないものを最

後の終結と見る危険を犯してさへも、一の最後の終結に達せんと、努力せねばならぬことを覚る

学は盲騫的であるだけである。夫れが判斷及び概念の形式を有する以上、共理論的印を押さ

可の権利を有しない。}

これ単に世界観論と學問との分離に付て、可一事が正当である。単も必然的に最後の目的を提出

する箇学は、夫れに於て一定の意味にて、不終結的發展系列に参加することを含ま、単に
不経過の現実を棄て、面して自己を必要とする点から、完全経過性を成立する簡明に、特殊性を
偏愛すること云ふことである。従って哲学は、理論的破壊の本質は、事間を研究する有効的、時間的素
を必要とする、材料の無益性を不経過性の為に、完全経過性と経過性の絶合を、最高の意味に
於て批判するものなるを、破壊するからである。それは哲学は、又は全く前進する発展の流れの中
に、一の静止を破することが必要に、静かに立つ現実の事間の活動として定義されるものである。
それに夫れが、真理のために、任意的自間、即も将来に歸して詰めると云ふことによるで、正當さ
れるものである。併し不経過的経過性を棄てると云ふ事は、事間としての世界観的承認、破壊的で
ないか云ふ問題が起こるが、決してそうでない。是れその特殊性及び謎め、異様な性質のもので
不経過的特殊性の形相を於て、元々在るべき云ふことを破れるからである。哲学に於ては、素
を経過の特殊性を含められて居ると云ひ得るのである。哲学の考察は、従て決定的経過を破る
べき疑念は、又経過を強いるのであるが、同時に夫れは又、組織論者を大に過すことが、出来るのであ

倒立（ハッカ=の假設論に於て）

第十四巻（雑誌第六号）元年三
余は時間の実在として、確かに続く程度を絶えず告げられながら、余はこの事を学問に通用せんとす。（略）